

消滅危機方言の記述文法は誰のために

著者	狩俣 繁久
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	44
ページ	1-13
発行年	2020-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00024285

消滅危機方言の記述文法は誰のために

狩 俣 繁 久

1. 記述文法とは

消滅危機方言にとって望ましい「記述文法」とはどのようなものを改めて検討する¹。
下地理則（2019a）の「記述文法」についての次の記述から検討を始めよう。

ある言語体系の総合的記述を示した学術成果のこと。記述文法は、学習・規範文法に
対立する概念である。学習・規範文法は、正しい言い方と間違っただけの言い方を区別し、言
語学習という実用的な目的を持つ。

これに対して記述文法書は、あくまで言語学的な観点からその言語体系を実態に即し
て正確に記述することを目的としている。しばしば、参照文法という言い方もなされる
が、これは学習・規範文法と記述文法に対して中立的な表現である。学習者が言語を学
ぶ際に参照する文法、という意味でも言語学者がある言語の事実を知るために参照する
文法、という意味で使われるからである。

記述文法の目的は、その言語体系の正確な記録である。よって、当然言語体系全体に
わたって幅広く記述されていなければならない。言語体系全体を扱うという目標の完璧
な達成が不可能だとしても、その言語の主要な仕組みが読者に伝わるように、「音韻か
ら複文まで」幅広く記述する必要がある。

下地理則（2019a）の挙げた三つの文法を我田引水的に整理してみる。

1. 記述文法

当該言語の「言語体系を実態に即して正確に記述することを目的」とする。

2. 参照文法

学習者が言語を学ぶ。言語研究者がある言語の事実を知る。

3. 学習・規範文法

正しい言い方と間違っただけの言い方を区別し、言語学習という実用的な目的を持つ。

言語体系を総合的に記述するという目的は、記述する側から見たものだが、参照する
という目的は利用者側から見たものだ。「正しい言い方と間違っただけの言い方を区別する」とい

¹ かりまたしげひさ（2011）でも論じている。

う規範性を重視する点を除けば、実用的な目的で利用するのは、参照文法も学習・規範文法も同じだ。上の三つの文法の違いは、その目的とするところにあるが、音韻から複文までの言語体系全体にわたって幅広く記述してあるという点に大きな違いはないだろう。

下地理則（2019a）は、参照文法に二つの目的を挙げているが、それは、利用者の性格の違いだ。同じ“文法書”を異なる目的で利用することもできるが、どのような利用者を念頭におくかによって、その書き方に大きな差が出る。すなわち、言語学の専門的な知識を持たない一般読者を想定して書かれた“文法書”と言語学者を想定して書かれた“文法書”は違ったものになる。この点については後述する。

2. 対象となる言語の性格の違い

日本語や英語のような圧倒的な数の母語話者を有する大言語の参照文法と琉球方言の下位方言のような消滅の危機に瀕した弱小方言の参照文法とは、違ったものになる。

日本国内の学校で使用される“国語”の教科書や国語辞典の巻末に付されている文法は、“学校文法”と呼ばれ、文部科学省のお墨付きを得た文法理論で書かれた“学習・規範文法”だ。欠陥だらけの“文法”がいまだに命脈を保っているのは、母語話者にとって実用的な文法書としての重要度が低く、期待されていないからだろう。これが役に立たないことは、外国人に対する日本語教育に利用されていない現状が証明している。欠陥だらけゆえに実用的でないというのが現実なのだ。

国内で日本語を学ぶ学習者は、教育機関以外でも日常的に母語話者に接触する機会も多く、テレビやラジオや映画などの様々なメディアもある。日本語を使わなければ生活できないという学習者の切実な要求もある。そのような状況の中で学習者が様々な努力することによって話したり聞いたりする能力を身につけることができるようになる。学習者の努力も大きいですが、日本語学習は圧倒的な日本語の海の中に暮らすという環境の威力も大きい。

翻って、弱小の消滅危機方言はどうだろう。弱小の消滅危機方言を学ぶための環境は最悪だ。日常的に当該方言に触れる機会もほとんどないし、その環境はますます悪くなる。当該方言の海の中で暮らすというのは夢のまた夢だ。当該方言をおしえてくれる“教師”もほとんどいない。方言を学ぶ教室などの環境にも恵まれていない。最も深刻なのは言語を学習するために必要な辞書と文法書と学習用教材がないことだ。当該方言を身につけたいという次世代の若者の希望を叶えさせるために、当該方言の研究者の果たす役割は極めて大きい。

3. 琉球方言の記述文法

琉球方言研究は、他の本土諸方言に比べて研究者の数も少なくなく、研究蓄積もあった。金田章宏（2007）は文法研究について次のように述べていた。

ある大学の教員からこんな話をきいた。学生がある方言の否定形について論文をかいたのだが、ではこの動詞の肯定形はどんなかたちか、という質問に対し、それはしらべていません、という答えがかえってきたそうだ。もちろんこれは極端な例かもしれないが、自分がえらんだテーマ以外の内容についてはあまり関心をもたない学生がおおいらしい。

冒頭の大学教員のことばにはつぎのような嘆きがつづく。いまの方言研究はどれも「群盲象をなで」ているような状況になっているが、対象をある部分だけに限定してそれ以外はやらないという研究をしていたのでは、おなじ対象をみていたとしても、ちがうものにみえてしまう可能性があるし、なにより全体像がみえてこない、と。

(金田章宏2007 p. 83)

下地理則 (2018) も同じ趣旨のことを次のように書いている。

言語学では現在、領域の細分化が進んでいる。ほとんどの研究者は、言語を専門としているというよりも、現象を専門としているといった方が良い。数えきれない専門家がいて、それぞれ立脚する理論も異なる。それはそれで構わない。しかし、どんな現象に関心があったとしても、そしてどんな理論を採用していても、一度立ち止まって、言語全体を俯瞰することは重要である。言語体系は、個々のパーツ（現象）が有機的に繋がっていて、それでいて体系内のパーツが異なる速度で、異なる方向に変化し、体系全体が常に軋みを生じながらゆっくり変容していく。よって、相互に関連のない現象など存在しないし、例外のない共時規則も存在しない。共時体系の軋みがなぜ生じるかは、通時変化を明らかにしながら、体系を俯瞰しなければ納得できないことが多い。これらの事実気づく唯一の方法は、実際に自分で言語体系全体を同時に扱って、1つの記述モデルを示すことである。(下地理則2018. p. 337)

かりまたしげひさ (2011) も「消滅危機方言の継承に不可欠な記述文法は、可能なかぎり包括的で体系的でなければならない」と述べた。

「当該方言の文法に関するすべてを網羅した記述文法は、琉球方言のどの下位方言にも存在しない」とも述べたが、特定方言の言語体系全体にわたって幅広く網羅的に記述された学術成果はあった。そのうちの最も古いものの一つが寺師忠夫 (1985) 『奄美方言、その音韻と文法』だろう。これは奄美大島名瀬市出身の寺師忠夫 (1905-1978) の遺稿を発刊したものだ。全体が240頁の音韻篇と文法篇からなる。目次を以下に挙げる。原稿は40年以上も前に執筆されていて、当時の研究状況に依存するという時代的制約はあるが、記述文法としても参照文法としても優れたものだ。なお、寺師忠夫 (1985) は、教科研東京国語

部会・言語教育研究サークル著（1963）に学び、その記述方法に倣って奄美大島名瀬方言を記述したものである。その著者の中に鈴木重幸、鈴木康之、宮島達夫が入っている。教科研東京国語部会・言語教育研究サークル著（1963）の単語の認定等の文法論の根幹部分の考え方を引き継ぎながらも大きく改変されたものが鈴木重幸（1978）である。

音韻篇 第1章 奄美方言とは／第2章 方言の音韻構成／第3章 音韻の実際について
文法篇 第1章 単語の文法的な意味と文法的な形／第2章 品詞／第3章 語形変化／
第4章 名詞：名詞の語形変化、種類、格、とりたて、並列／第5章 動詞：動詞の語形、動詞の本詞形、分詞形、動詞の語形構造、たちば、すがた、やりもらい、希望態、外見態、とりたて／第6章 名詞の用言並みの語形：語形、本詞形、分詞形、希望態、とりたて／第7章 形容詞・形容動詞：語形、本詞形、分詞形、外見態、希望態、とりたて／第8章 副詞：普通の副詞、指示副詞、陳述副詞／第9章 連体詞／第10章 接続詞／第11章 感動詞／第12章 付属辞：助詞、助動詞／第13章 補助的に用いられた単語：話し手の態度や気持を表わすもの、動詞の過程のちがいを表わすもの、他の単語に対する関係を表わすもの、句を接続するもの

宮城信勇（2003a, b）、富濱定吉（2013）等の方言辞典に付録として入っている文法解説も記述文法とみることができる。宮城信勇（2003）、富濱定吉（2013）のいずれの解説も音韻、および名詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞や感動詞などのその他の品詞、助詞や助動詞に至るすべての品詞について解説があり、用例も付いている。動詞や形容詞は活用形ごとに用例付きで掲載され、活用型の分類もある。辞典本文には動詞や形容詞や副詞その他の品詞の全ての単語が意味記述とともに用例付きで掲載されている。活用型を代表する動詞は、活用形ごとに例文が付いている。特定方言の言語体系全体にわたって幅広く網羅的に記述された学術成果としての記述文法としても参照文法としても優れた著作だ。

一つの言語体系全体を俯瞰する記述文法として宮古語伊良部島長浜方言の記述文法をまとめたのがShimoji, Michinori（2008）、下地理則（2018）だ。Shimoji, Michinori（2008）以降、若い研究者たちがShimoji, Michinori（2008）を参考に博士論文のテーマとして琉球方言の下位方言の記述文法を書くことが増えてきた。Shimoji, Michinori（2008）は、Shimoji, Michinori（2017）として九大出版会から刊行され、その後、日本語版の下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部方言』が刊行されている。この文法書を若い研究者が記述文法のモデルとして活用している。琉球方言の、特に伊良部島方言を含む宮古諸方言を学ぶ若い研究者にとっての参照文法としての役割も果たしている。かりまたしげひさ（2010）の懸念は、克服されつつあるようにみえる。

4. 消滅危機方言にとっての記述文法とは

記述文法と参照文法は、記述する側からみるか、利用する側からみるかという目的の違いによるものだ。研究者が当該方言を網羅的で体系的に記述していれば、それを利用する研究者にとっても学習者にとっても有益であることは間違いない。しかし、利用者が言語学の専門的な知識を持たない一般読者のばあい、どのように記述されているかは重要だ。

将来、ある若者が自分の故郷の方言を使用して、文学作品や映画の脚本を創作してみたい、あるいは、文学作品を翻訳したり当該方言の吹き替え版を製作したりしてみたいと決意したとしよう。その若者は、“記述文法”書と方言辞典を傍らにおき、たくさんの言語資料や言語作品に目を通し、これとおもう表現を探しながら文を綴ることになる。そのような若者の創作欲に応えられるように、大言語と同じように言語作品を創作したり翻訳したりするときに必要な質と量をもった記述文法が必要なのだ。それに応えられるのは研究者だ。下地理則（2018）は言語全体が俯瞰されていれば、立脚する理論が異なっても、構わないという。一般読者にとってUser firstの参照文法書として機能していれば、どんな文法理論であっても構わないともいえるが、大言語と同じく言語作品の創作や翻訳が可能になるだけの質と量を確保すると同時に、言語学の専門家でもない一般読者が読んで理解できるほどに分かりやすいものであることが大前提だ。

5. 無標の形式を認めないこと

宮城信勇（2003b）は優れた著作だが、参照文法としてみたとき、改善すべき点がいくつかある。その一つが格形式として重要な、助詞の付かないハダカ格についての記述が無いことだ。

宮城信勇（2003b）には文法的なカテゴリーとしての格をどう定義しているかの記述がなく、その詳細は不明だが、宮城信勇（2003b）は、例文を表示するとき、前置される名詞とのあいだにスペースを設け、単語分かち書きにしている。助詞を形態素ではなく単語として認定していることがわかる。

しかし、石垣方言でハダカ格の名詞が使われていないわけでない。宮城信勇（2003a）には次のような用例を見ることができる。①は主格になって形容詞述語の主語になる例で、②は主格になって動詞述語の主語になる例だ。なお、②はいわゆる存現文だ。③は、ハダカ格の名詞が対格になって客体の状態を変化させる他動詞述語の補語として現れ、④は、ハダカ格の名詞が生産動詞を述語に持つ文の補語として現れ、生産される結果物を表す。⑤はハダカ格の名詞が与格になって変化の結果物を表し、⑥は与格になって行先を表す間接対象を表す例だ。石垣方言のハダカ格の名詞は、多義的な意味を表す基本的な格形式だ。

- ① クンジョー ヤニッシャーンドー（性根がよろしくないぞ）。
- ② アーミ ホーンドー。ドゥーンヌ キシ ハリヨー（雨が降るぞ。蓑を着ていけよ）。
- ③ オー クラシウンデドゥ ウリウ²（豚を殺そうとしている）。
- ④ クラ タティンデドゥ アラゲン（蔵を建てようとしている）。
- ⑤ ンメーンヌ クトゥカラドゥ アイ ナリリウ（ちょっとしたことから喧嘩になっている）。
- ⑥ ヤラベアー ガッコー イク トウシウ ナリッタ（子供は学校に通う年になった）。

宮城信勇（2003a）の本文編には単語だけでなく、慣用句も連語も助詞や接頭辞などの接辞も見出し項目に上がっているが、無標のゼロ形式は上がっていない。ハダカ格の名詞は、実際の会話にも多く現れ、主格や対格などの重要な意味を担い、辞書本文の用例に類出する。⑤⑥のような日本語標準語にはない与格の用法もある。そのハダカ格の名詞が辞書の見出し項目になくても、文法編にはハダカ格の記述があつてしかるべきだ。なお、下地理則（2019b）は、ハダカ格の名詞、すなわち無標形式の存在の重要性を前提にした記述であり、ハダカ格の名詞を基底（デフォルト）においた記述を行っている。

宮城信勇（2003a, b）の不完全な記述は、格助詞を含む助詞を単語と認め、格助詞そのものが意味を担うと考えて、ハダカ格という無標の形式を認めなかったことに因る。研究者が自らの文法理論に従って単語とは認めないゼロ形式について記述しないことを、百歩譲って認めたとしても、日本語のような大言語ならユーザーに大きな影響はない。しかし、消滅危機言語である弱小方言のばあい、“実態に即して正確に”に記述するという点から見

² 一般への利用も考慮するならカナ文字等を使用した発音の表記や音声表記も重要な要素だ。宮城信勇（2003a）は、日本語のpi, ki, bi, giのiに対応して現れる母音が常にs, zのような摩擦的雑音を伴って現れると記述している。

破裂音 [p, b, k, g] の後に中舌母音 [ɪ] が立つとき、渡り音の摩擦的雑音 [ʰ, ʷ] が [pʰ, bʷ, kʰ, gʷ] のように現れるのが原則である（宮城2003a, p. viii）

しかし、奄美方言などに現れる中舌母音と同じ名称を使用し、中舌母音を表す音素文字を使用して表記している。カナ文字も中舌母音を想起させるような、イ段のカナ文字に小字のウを組み合わせて表記している。宮城信勇（2003a, b）は、奄美方言等に現れる中舌母音とは、由来する音も音色も明らかに異なる音の中舌母音と認定している。この母音の中舌母音として記述すると、非母語話者が当該音の習得を阻害してしまう可能性がある。

なお、青井2012：91は多良間方言に見られる同じ音素についてパラトグラムとリングオグラムを使った分析の結果から、当該音が舌先のな特徴をもつと結論づけている。

「中舌母音」は調音時に舌端が舌背（前舌及び奥舌面）と同程度に持ち上がっているということである。Laver（1994：272）は、ほとんどの母音が舌端および舌尖を舌背よりも下げて発音されると述べているが、この記述を踏まえると、舌端を下げずに舌背と同程度に持ち上げて口蓋との狭めをつくっているという意味において、「中舌母音」は舌先のな特徴をもつとすることができる。

て大きな問題がある。参照文法として不完全だという誹りは免れまい³。日本語のような大言語とは異なり、弱小の消滅危機言語は、研究者の書いた記述文法が唯一の参照文法として使用されて、後世の人々の継承に大きな影響を与える。

6. 文法的なカテゴリーの相互関係

石垣方言の助詞ヌ [nu] は前接の名詞が主語であることを表す。とりたて助詞ドウ [du] も主語を表す名詞に直接後接することができる。ヌ格の名詞にドウ [du] が後接したンドウ [Ndu] の格＝とりたて形も前接の名詞が主語であることを表す。

- ⑦ アーミス ホーンドー。ナカカイ ペーリ (雨が降るぞ。中に入れ)。
- ⑧ カジヌ スグン (風がそよぐ)。
- ⑨ カジュー スギ ピラギシャーソー (風がそよいで涼しいよ)。
- ⑩ ウキウナーカラ タユリウンドウ キーリウ (沖縄から便りが来ている)。
- ⑪ ウンヤース チュントーマンドウ アンクダンユー (その家の小さな人が言ったんだよ)。

ヌ格の名詞が主語で現れる⑦と、ハダカ格の名詞が主語で現れる先の②は、想定される使用場面が同じなのに、一方はヌ格で、もう一方はハダカ格だ。同じ存現文の⑧と⑨も一方はヌ格で、もう一方はア格の名詞だ。⑩⑪はヌ格の名詞にとりたて助詞ドウの後接した名詞が主語になっている。

- ⑫ ムヌ カバシチュクッカー ガバ ホースハー (物を被せておけば汚れは付かない)。
- ⑬ ダラー。ガバドウ フイリッテ (汚いなあ。汚れが付いているではないか)。
- ⑭ ヌーリウヌ ホーンケン アラーナーダ (苔が付くまで洗わなかった)。
- ⑮ アシボー イデー (できものが出来て)。
- ⑯ コーネー キューン (坊やが来る)。

⑫⑬⑭は、いずれも述語動詞のホーン (付く) が主語のガバ (汚れ)、ヌーリウ (苔) と組み合わせあって、物の出現を表す文だ。⑮は述語動詞イディン (出る) が名詞アシブ (できもの) と組み合わせあった、出現を表す文だ。⑫はハダカ格の名詞が、⑬はドウのついた名詞が、⑭はヌ格の名詞が、⑮⑯はア格の名詞が主語になっている。宮城信勇 (2003a)

³ 宮城信勇 (2003a, b) は用例が豊富で、それを基にした参照文法の編集は可能だろう。

ではいずれも日本語訳ではガ格の名詞に訳されている。

⑨のカジェーはカジ（風）に、⑮のアシポーはアシブ（できもの）に、⑯のコーネーはコーニ（坊や）に、主格のア [a] が後接して融合したア格の名詞だ⁴。この格助詞ア [a] は他の琉球方言に見られる主格の助詞ガ [ga] のgが音脱落したものだ。

日本語標準語のガ格の名詞が主格の意味を表しながら、排他的な意味を付与されるのと同じく、石垣方言のヌ格とア格の名詞にも排他的な意味や指定強調（卓立）がある。そのヌ格とア格がドウのとりたて形と作る張り合い関係の中にハダカ格の名詞が入り込んでいるのだ。

次の⑰⑱は欲求・希望や感情の向けられる対象を表す補語がドウのとりたて形で表されている。石垣方言のばあい、欲求や感情の対象はハダカ格でも表されるが、日本語標準語ではガ格の名詞で表される。主語と直接関わるものではないが、ハダカ格とドウのとりたて形の使い分けの記述に際しては、合わせて分析することが求められる。

⑰ バナー ファイムヌドウ プサーリウ（私は食べ物が欲しいのだ）。

⑱ ウリドウ タユリウ ヤダソンガー（それが頼りだったのにねえ）。

文の主語をめぐってもう一つ重要な要素として主題標示と対比を表すとりたて助詞ヤ [ja] がある。格ととりたてという文法的なカテゴリーが排他的、あるいは、シンタグマティックな関係としてあるのではなく、重層的でパラダイグマティックな関係をなしている。そうだとするなら、ハダカ格、ヌ格、ア格、ドウのとりたて形、ヤのとりたて形の分析と記述も総合的でなければならない。

下地理則（2019b）も格ととりたての二つの文法的カテゴリー総合的に扱って研究する

⁴ 宮城信勇（2003a, b）によれば、石垣方言には格助詞ガ [ga] が無いことになっていて、その記述がない。しかし宮城信勇（2003b）では、親族名詞の呼称、および人名、人名のように用いられる普通名詞に現れるこの形式をヌ [nu] の変種と考えているようだ。「形が変わってヌ [nu] を付けない場合がある」と記述し、「係助詞ヤ [ja] に接続する場合と同様」だとも記述している。この形式が、①主格のヌと同じ意味で用いられること、②連体格としても用いられること、③親族名詞の呼称、人名、および人名のように用いられる普通名詞に用いられること、④この形式が名詞に後接した変化形の末尾に現れる音声形式は、aを想定した方が自然な音韻変化を想定できることから、格助詞ガ*gaのgが音脱落した形式だと考える。なお、石垣方言ではa:ruŋ（上がる）、na:na:（長々と）のように語中のgが音脱落する。

宮城信勇（2003b）の例を以下に示す。

matsiŋgane: kī:ŋ (matsiŋganiが来る)

ma:tfe: kī:ŋ (ma:tfiが来る)

nabema: kī:ŋ (nabemaが来る)

sando: kī:ŋ (sanduが来る)

kane:rasē: kī:ŋ (kane:rasīが来る)

ことについて次のように述べている。

ガは、主語であることを標示する格標識であると同時に、主題解釈を回避するための脱主題化標識であるというのが本稿の主張である。すなわち、格ととりたて（情報構造）という2つの異なるカテゴリーを1つの形態素で標示するという分析である。日本語学では、井上以来角田に至るまで、これら2つのカテゴリーを峻別するということが強調されてきたが、結局、峻別すべきではない（峻別できない）というのが本稿の主張である。ガとハは、同じレベルで、すなわちパラディグマティックに捉えるべきなのである。

（下地理則2019b, p. 11）

一般userのための参照文法には、主語として現れるハダカ格とヌ格とア格、ドゥとヤのとりたて形の違いがどこにあるのか、類似の文法的な意味を表す他の格形式との間にどのような使い分けがあるのか、それぞれがどんな場面で使われるのかについての記述が不可欠だろう。そのためには、無標の形式と格助詞ととりたて助詞（焦点助詞）を同じ土俵に上げなければならない。一つの言語形式は多機能的であり多義的であり、複数の異なる小体系に構成要素として加わる。対象のある一つの側面だけに限定し、別の側面に目を向けない分析をしたり、別々の分析をただで総合的な分析をしなかったりしては、その対象の本質には迫れず、おなじ対象を分析したとしても、違う結果が出たり、見落としが出たりする可能性がある。

7. 対格をめぐる

石垣方言には先の③④の用例に示したように対格を表すハダカ格の名詞があるが、宮城信勇（2003a, b）はハダカ格を格形式と認めていないので、対格の形式についてのまとまった記述がない。また、宮古方言や『おもろさうし』に見られる対格の助詞ユ [ju] が石垣方言にもあるが、宮城信勇（2003b）は、このユ [ju] をとりたて助詞と認定し、次のように記述している。

石垣方言は目的格を表わす助詞が元来なく、裸格を用いるが、その裸格によくユ [ju] が接続するので、目的を表わす格助詞として、従来しばしば解釈されてきた。又、実際に目的格のように使われるふしもある。例えば、普通の文に次のように使用されている。

ヤラビユ ニバシウンデドウ シーリウ（子どもを寝かそうとしている）。

ファージュ アンジ イザナーリヤ ミシャーリウムヌ（子どもをそんなに叱らなければよいのに）。

ドゥーヌ ウヤユ アンジ フミラリリヤ（自分の親をそんなに褒められるとは）。

クリユ トゥルンデ シーソンガドゥ トゥラリンワ (これを取ろうとしているのだ
が取れないんだよ)。

アッコユ カーシウナドゥ ハッタ (おいもを売りに行った)。
(中略)

目的格のように使われているユ [ju] にもヤ [ja] がついて、先の原則通り発音は融合してヨー [jo:] となる。(中略) このヨー [jo:] という形はユ [ju] に係助詞ヤ [ja] のついた形であって、ユ [ju] が格助詞のように使用されるときだけに表われる。(下線は狩俣)

宮城信勇 (2003b) 自身が認めているように、“実際に目的格”として“普通の文”に使用される”ユ [ju] には格助詞としての用法が存在することは動かしがたい事実だ。格助詞として使用されるユ [ju] にとりたて助詞ヤ [ja] が後接してヨー [jo:] となるのも、ユ [ju] が格助詞であることを支持する。なお、宮城 (2003b) には、⑬のような添加を表すとりたて助詞ン [N] (も) の後接した例文を見ることができる。これもユ [ju] が格助詞であることを支持する。なお、宮城信勇 (2003a, b) は、ユンをとりたて助詞 (係助詞) と認定している。

⑬ ピットゥヌ ファージュン マータキ アッタラサ シー (人の子供も同じように可愛がれ)。

⑭ ウリユン ムチ ハリ (これをも持って行きなさい)。

宮城信勇 (2003b) に示された係助詞としてのユ [ju] の用法は、命令文と勧誘文に現れるが、それ以外の場所ではドゥ [du] が現れる。とりたて助詞ドゥ [du] とユ [ju] は、相補的な関係にあり、とりたて助詞としてのユ [ju] の現れ方は限定的だ。宮城信勇 (2003b) は、ユ [ju] が格助詞か係助詞かの二者択一の選択をした結果、ユ [ju] をとりたて助詞 (宮城は係助詞) とのみ認定し、格助詞として認めなかったのだ。無標のハダカ格に対して有標のユ格の名詞に何らかのとりたて性が認められたとしても、そのことを理由にユの格表示機能を否定することとは別の問題だ。しかし、対格として機能するユ [ju] の厳然たる存在を無視できず、上の引用のような記述に至ったのだらうと想像する。

石垣方言には直接対象を表す形式として、ハダカ格、ユ格だけでなく、名詞にとりたて助詞ドゥのついたとりたて形、パのついたとりたて形がある。パの後ろにさらにドゥを付けた形もある。

⑮ キューヤ クヌ ドゥナシテイドゥ キウサリ (今日はこの衤を着よう)。

- ② トウツピニ カイリキー、ピウトウバ ウバーシ（急に帰って来て、人を驚かせて）。
- ③ ミイームクバ アンジ ムタチウカーヌドー（花婿をそんなにいじめるでないよ）。
- ④ ダラー。ノーバドゥ ファイリャ（汚いなあ。何を食べているのか）。

宮城信勇（2003a, b）は、バ [ba] を係助詞と認定し、格助詞とは認定していない。しかし、バに対格の格助詞としての用法も認めている。

強調を表わす。前項のユ [ju] とよく似ていて、目的を表わす格助詞のようにも思われ、又、格助詞とする考え方もある。しかし、下記の例のように目的格以外にも使われるので、一応係助詞として扱う。

アワリヌ ミーカラ ナマバ ナラレーラー（苦勞の境遇から今日になることができたねえ）。

コービヌ トウシウバ ナリッテ ノードゥ アンキャ（こんな年になって何を言うのだ）。

これらの例は格助詞とは言えない。強調の助詞というべきである。

ただし(3)のユの (d) で説明したように、ユが目的格の助詞同様に使用されるのと同様、このバも目的格の助詞として使用されるふしもある。

バ [ba] も、ユ [ju] と同じく格助詞としての意味もとりたて助詞としての意味も有しているとみるべきだ。格助詞としてのバ [ba] は、前接の名詞が対格を表す名詞であることも示しながら、ハダカ格の名詞やドウのとりたて形とのパラディグマティックな関係の中でとりたて的な意味を持たされている。バ [ba] もユ [ju] も多義的で多機能であることを認めれば、宮城信勇（2003a, b）の問題点は解決され、石垣方言の対格と関わるハダカ格、ユ格、ドウのとりたて形、バのとりたて形を総合的に記述することが可能になる。

8. User firstの参照文法－審判は一般読者

本報告の5節、6節、7節でも述べたが、一つの言語形式は多機能であり多義的だ。多機能で多義的な形式は複数の異なる小体系に構成要素として加わる。複数の小体系が集まって部分的に重なりながら、さらに上位の体系を構成する。個々の言語形式は、その重層的な構造の中にある。

体系を構成する他の要素との張り合いの中で自らの意味を発揮するとともに、構造に縛られた意味を付与される。下地理則（2018）は「言語体系は、個々のパーツ（現象）が有機的に繋がっていて」、「相互に関連のない現象など存在しない」と述べ、金田章宏（2007）は「対象をある部分だけに限定」したのでは、「全体像がみえてこない」と述べているが、

それは、格、とりたてだけでなく、アスペクト、テンス、ムードしかり、受動・使役のヴォイスに授受表現を加えたベネファクティブしかり。他の文法的カテゴリーおよびそれを構成する言語形式においてしかりだ。

日本語モノリンガルの若い人が琉球方言を獲得していく過程で目標言語の琉球方言に第一言語の日本語の要素が持ち込まれた日本語クレオロイド琉球語とでもいうべき第4の言語変種が生まれつつある。日本語を母語とする琉球方言の学習者が日本語にはない琉球方言の意味や用法を獲得できず、形式的には琉球方言だが、中身は日本語という接触言語がクレオロイド琉球語だ。

琉球方言の母語話者も琉球クレオロイドとのバイリンガルであり、日本語を琉球方言らしい表現に容易に翻訳できる。一方、琉球方言には本来存在しない表現があるとき、形式的に直訳してしまうことも少なくない。伝統的な琉球方言としては変なのだが、日本語が堪能な話者や琉球クレオロイドを第一言語にする話者はそのことに気づかない。研究者もそのことに最善の注意を払わなければならない。

記述文法が体系的なアプローチをとることは必然だ。方言といえども言語が体系的な存在である以上、言語継承のためには、特定の領域や部分に偏った記述ではなく、形態論と構文論について、形式と意味・機能の両面からの網羅的で体系的であることは言を俟たないが、記述文法を利用者の側から見たとき、しかもその利用者が言語学についての知識のない一般の利用者の側から見たとき、使いやすくて分かりやすいかということは最も重要な要素だ。

記述文法が不完全なものであれば、それを参照文法として使用した若い人々の琉球方言の日本語クレオロイド化を進めることになりかねない。記述文法を書き残す研究者の役割は大きい。記述文法の評価は、後世の一般userが行う。

過疎化と高齢化によって母語話者が減少するとともに、言語接触によって琉球方言の日本語化が進行している。伝統方言話者が健在なうちに伝統方言のベストな記述研究を実施することが急がれる。時間との勝負だ。

参考文献

- 金田章宏 (2007) 「体系的な記述をめざして－沖縄西表方言とのとりくみを例に－」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 7月号
- かりまたしげひさ (2011) 「消滅危機方言の継承のための記述文法－消滅危機方言から見た日本語記述文法の未来」『日本語文法』, 11巻2号, pp. 30-42
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル著 (1963) 『文法教育その内容と方法』 麦書房
- 下地理則 (2018) 『南琉球宮古語伊良部島方言』 くろしお出版
- 下地理則 (2019a) 「記述文法」『明解方言学辞典』 木部暢子編, p.42-43

- 下地理則 (2019b) 「現代日本共通語 (口語) における主語の格標示と分裂自動詞性」『日本語の格標示と分裂自動詞性』竹内史郎・下地理則編, pp. 1-36
- 鈴木重幸 (1978) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 寺師忠夫 (1985) 『奄美方言、その音韻と文法』根元書房
- 富濱定吉 (2013) 『宮古伊良部方言辞典』沖縄タイムス社
- 宮城信勇 (2003a) 『石垣方言辞典 本文編』沖縄タイムス社
- 宮城信勇 (2003b) 『石垣方言辞典 文法・索引編』沖縄タイムス社
- Shimoji, Michinori (2008) A grammar of Irabu. A Southern Ryukyuan language. PhD thesis, Australian National University.
- Shimoji, Michinori (2017) A Grammar of Irabu: A Southern Ryukyuan Language. 九州大学出版会